

## 1. 本実践がめざすもの

本実践は「よりよい生活を創り出すために、学んだ知識と技能を用いて自ら実践しようとする子どもを育む学び」を研究テーマに、家庭科の見方・考え方を働かせながら体験したことを理論化し、実生活で活用できるようにすることを目指している。

昨年度に引き続き衣生活分野を取り扱っているが、今回は、「あたたかい着方」と「すずしい着方」の両方を取り扱うことで、日本の四季に対応するだけでなく、長期的な衣服計画を考える学習へとつなげていける流れとしている。

本校の児童は学校では制服着用であるが、制服は、年間を通じて快適に過ごしやすい条件を踏まえた着方をしやすいものになっている。そのため、通学時の衣服選択で頭を悩ませることは少ないが、休日や長期休暇期間中などの制服以外の衣服を着用しなくてはならない場面で、適切な衣服を選ぶという経験値は不足しがちである。制服以外の児童向け一般衣服に使われている素材にも関心を持たせ、学校外での快適な着方も考えることを通して、よりよい生活を営む力を育成していくことが望ましい学習成果となる。

「あたたかい着方」「すずしい着方」の「あたたかい」「すずしい」は個人の感覚によるところが大きいですが、感覚で判断するのではなく、科学的根拠を踏まえた一般論としての「あたたかい」「すずしい」を理解したうえで、児童それぞれが理想とする「あたたかい着方」「すずしい着方」を具体的に明示できるようになることが必要である。実感を伴った理解のために衣服素材を用いた実験を行うことは有効な手立てとなり、児童の学習を深める要素となるものである。

## 2. 本実践から見えてきたもの

まず、前時で「あたたかい着方」を考えさせていた。衣服素材単体の特性だけでなく、重ねることによる特性も確認するための保温性実験を行うことにより、寒い時期には素材を吟味して重ね着することであたたかさを確保できるということを理解できていた。この事実を踏まえ、暑い時期には着用枚数を減らしたほうが「すずしい着方」になるのではないかという共通認識のもと、湿度の高い日本の夏に適した着方を考えさせていた。

児童は大人よりも体温が高く活動量も多いため、夏場はより汗をかきやすい状況にあるが、児童自身が自覚しているとは言えない。そのため、手袋を用いた実験を行うことで、湿度のある不快さを理解させ、最適な素材を選ぶだけでなく、汗をおさえるための肌着の有用性にも注目させようとしていた。実験結果を不快感マークで示すことにより、児童に自分自身の感じ方を分かりやすく記録させるだけでなく、他者との感じ方の違いも分かりやすく比較できるようにしていた。同じ条件で実験を行ったため、児童は他の児童も同じように感じているのではないかと思っていたようだが、他の児童の感じ方を理由とともに比較する場を設けたことで、ビニール手袋で汗をかいた手でもあまり不快とは思わない児童もいるなど「すずしい」の感じ方にもかなりの個人差があること、また、教員から一般的な日本の夏に適したすずしい着方の説明を聞くことにより、自分にとって快適と思う「すずしい着方」を見つけることの大切さに気づけていた。

本実践を通して児童は、自分にとっての「あたたかい着方」「すずしい着方」の基準（ものさし）を持つことができたといえるだろう。

## 3. 今後の展望

家庭科では、全体を通して学習した内容や客観的な事実を踏まえ、個人としてどのように考え判断し、生活をよりよくするための手立てとするかが重要な課題となる。児童は、大人が思っている以上に周囲から情報を収集し、自分自身の知識として蓄えているが、経験に基づく知識の獲得はやはり何物にも代えがたい。

各家庭で十分な生活経験ができるわけではないため、実験や実習を取り入れた授業を行うことにより、より具体的に生活を考えられるよう、今後も工夫を凝らした授業実践に期待したい。